



Title	<資料>初めてのヨーロッパ
Author(s)	有吉, 敏彦
Citation	長崎大学外国人留学生指導センター紀要. vol.3, p.187-187; 1995
Issue Date	1995-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/5466">http://hdl.handle.net/10069/5466</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T19:39:55Z

# カルチャーショック

## 初めてのヨーロッパ

西ドイツのフンボルト財団給費生として、チュービンゲンに到着したのは1966年7月末であった。ネッカー河畔のこの街は1477年大学が創設され、人口5.5万のうち大学生が1.5万の緑に囲まれた大学都市で、家々の窓やベランダに花々が満ち、街の中に大学があるのではなく大学の中に街があるという雰囲気であった。

毒性学研究所はくすりの代謝研究で世界的に有名なレンマー教授の下で専門の異なる6人の博士が、それぞれの実験助手と7:30c.t. (cum tempore, 15分遅れて) から、午前中4時間、午後4時間、精力的に教育・研究で過ごし、コロキウムや合同セミナーは18:00c.t. や20:00s.t. (sine tempore, 定刻に) から行われるいかにもドイツ的、合理的なものであった。医学、生化学、化学専攻の学生達が授業中に頻りに質問すること、教授達の講義が懇切丁寧で質問にも熱心に応答されること、希望する教授の講義は他の研究所の研究者も聴講されることなど、驚きとともに新鮮であった。

バーデンビュルテムベルグやバイエルン地方の人々は一般に明るく、情が厚く、おおらかな気質の人が多くお祭り好きだ。また、積極的に異文化に接してみようという気持が私には感ぜられた。家族ともども、のちには家族のみ毎月1回は招待してくれた熱帯医学のヘフラー教授一家(写真)、心理のクレッチュマー教授一家。5歳の長女と2歳の長男を連れた妻が市役所前広場の朝市で買物中、子供達の頭を撫で、頬をさすり熱心に話かける“おじさん”や“おばさん”達。

デッキチェアにピキニ姿で太陽を浴び本を読む女性、白鳥の浮ぶネッカー河でピキニの女子学生がボート遊びをしたり、革ずぼん編上げ靴、赤ん坊は押車にのせ



ヘフラー教授夫妻を中心に(向って右端が筆者)

## 連載第1回

ARIYOSHI TOSHIIKO  
有吉 敏彦



公園や近郊の森の中を何時間も悠然と散歩する姿は、森林浴として今では珍しくもないが、26~7

年前の日本では想像も出来なかったことである。実験助手(女性)が、1カ月の休暇をとり、スペインやイタリアの地中海沿岸、ギリシャのエーゲ海などでレジャーを楽しみ、肉屋、パン屋、酒屋、菓子屋さんなども店を閉じ、リビングカーを引張って旅行に出かける。人生の生き方、生活の楽しみ方は同じ敗戦国の戦後21年ドイツと日本との間の大きな落差をみた思いであった。

フンボルト財団からは現在も雑誌や会報が送られてくるが、ドイツ語の手帳やカレンダーも毎年受領している。アフターケアには頭が下がる。定年後再び彼の地を訪れたいとしきりに思うこの頃である。

(外国人留学生指導センター長・薬学部教授)

## 17年後のカルチャーショック?

MIYAHARA AKIRA  
宮原 彬

来年はベトナム統一20周年に当たるが、統一前後の3年半余り、私はハノイにある貿易大学で日本語を教えていた。大学とは言っても、校舎は平屋建ての粗末な小屋が何棟かあるだけだった。教科書は、日本人教師が書く原稿をベトナム人の先生がその都度古い和文タイプで原紙に打って謄写版で印刷していった。紙は表面がデコボコしていて、印刷された文字は見にくく、それが原因で学生たちはよく漢字を間違えて覚えた。学生は、みんなやせていて、服装も貧しかった。中には戦場で銃撃され、その弾丸がまだ体の中に残っている者もいた。

しかし、学生たちは明るく、勉学意欲も旺盛で、優秀だった。朝、車で学校に行くと、学生たちが校門のそばの畑の中で、あるいは、大きな木の上で、教科書を片手に復習をしていた。授業中の文型練習の際の声の大きさは感動的でさえあった。

猛烈な蒸し暑さ、皮膚病、蚊、停電、断水に悩まされはしたが、私は充実した日々を過ごした。

昨年12月、17年ぶりでハノイに行き、3週間滞在し